

1978年6月、司馬さんに対する懐の深さに感じ入る。伊予・西土佐の道」の取材で宇和島周辺を訪れた。その折、当時の図書館長、渡邊喜一郎さんに誘われ、僕のお車で宇和町（西予市）までお迎えに行った。

同行の、挿絵を描いていた画家の須田勉太さん、メラマンや出版関係の人たちと、まず1872(明治5)年築の小学校「明学校」に。そこから

司馬遼太郎と吉村昭

シーボルトの娘で日本初の西洋医学の女性医師、楠本イネが歩いた旧道を通り、法華津峠で眺望し宇和島に入った。

途中、バス停の地名をちらっと目にして博覧強記、教養や歴史観から次々と言葉が紡がれる。吉田さんの姓は、もとは葦が生えていた湿田から来ているのだと言われ、作家の言葉に

司馬さんは宇和島で出会った人たちに対して「古風な都会人」と評しているが、この夜も心底交遊を喜んで風だった。受け入れ側は、やさしくもてなしつつも特別扱いせず、尊敬の内にも対等な接し方であった。そこが司馬さんにとっ



て居心地の良い場所だったのである。

宇和島の歴史が関係する著作のための取材というこ

とだけではなく、十数回も足を運んだのはよほどのことであったに違いない。司馬さんは書いている。日本で一番好きな町は長崎と宇和島であると。

酒も入り興に乗ったのか、司馬さんは色紙に墨で何か描き始めた。見ると縦縞つなぎのスポンを穿いて飄々と座す須田さんの横顔を描いている。筆を置くと、刺し身の醬油を指に付け頬の凹を表し、「露団々 びるしゃな仏の 現れまする」と書き添えた。須田さんに対する思いなのだ。

この色紙は後でなぜか館長さんがくださり手元にある。しかし、その時の僕に特段の思い入れはなく、いかげんに仕舞っているうちにシミが出たりと、全く無礼なことをしたものである。

今考えると、小説家が絵かきをモデルに描き、別の絵かきがそれを持っている。妙で愉快な話ではある。

(吉田 淳治・画家)